一原 著一

^{99m}Tc 製剤を用いた心筋血流 **SPECT** における **SSPAC** 法の有用性に関する基礎的検討

熊井 由昌¹⁾ 新井 真美¹⁾ 林 万寿夫¹⁾ 浅津 輝¹⁾ 赤木 弘之¹⁾ 神崎裕美子²⁾ 岡山 勝良¹⁾ 鳴海 善文¹⁾ 大阪医科大学附属病院 中央放射線部
²⁾大阪医科大学附属病院 総合内科

Usefulness of SSPAC method in myocardial perfusion SPECT using $$^{99\mathrm{m}}\mathrm{Tc}$ products. A basic study

Yoshiaki Kumai¹⁾, Mami Arai¹⁾, Masuo Hayashi¹⁾, Akira Asazu¹⁾, Hiroyuki Akagi¹⁾, Yumiko Kanzaki²⁾, Katsuyoshi Okayama¹⁾, Yoshifumi Narumi¹⁾

Department of Radiology, Osaka Medical College Hospital

Department of General Medicine, Osaka Medical College Hospital

Summary

Regarding myocardial perfusion SPECT using ^{99m}Tc products, many facilities do not usually perform scatter correction or attenuation correction (NC method). With the recent advent of SPECT/CT, attenuation correction using X-ray CT (CTAC method) has become popular. Meanwhile, another method has been developed which estimates attenuation distribution in the body from scattered radiation window of SPECT (SSPAC method). In this study, we investigated the usefulness of SSPAC method for attenuation correction in a phantom experiment. We found that Background (BG) concentrations had an effect on preparation of the attenuation maps. SSPAC method is comparable to CTAC method in terms of attenuation correction effect, and it is superior to NC method in terms of visualization of ischemic and infarction sites, improving decreased RI accumulation in the cardiac inferior wall due to the attenuation effect. In SPECT during stress and at rest, we confirmed that one of the attenuation maps prepared by SSPAC method can be substituted for the other.

Key Words: Segmentation with Scatter and Photopeak window data for Attenuation Correction (SSPAC), Single Photon Emission Computed Tomography (SPECT), Triple Energy Window (TEW), Computed Tomography Attenuation Correction method (CTAC), Myocardial Perfusion

1. 緒 言

Single Photon Emission Computed Tomography (SPECT) では、散乱・減弱補正により定量性が向上する。脳血流 SPECT では、散乱線補正はTriple Energy Window (TEW) 法¹⁾、減弱補正はChang 法²⁾を行うことにより、定量性のある

SPECT 画像が得られる³⁾。しかし、心筋血流 SPECT において、TEW 法により心内腔と心筋のコントラストは改善するが、減弱の影響により下壁や中隔のカウント低下が顕著となり読影が困難となる。また、均一減弱体を仮定した Chang 法は、胸部が肺・脊椎・心臓・乳房など不均一減弱体で構成されているため正確な補正が困難であ

る。このような理由により、散乱・減弱補正を実施していない施設が多い 3 。

近年、減弱補正において、SPECT/CT 装置の 開発により X線 CT を用いた 手法 (Computed Tomography Attenuation Correction method: CTAC 法)が普及しつつあるが、別の方法として1999年 頃よりSPECTの散乱線ウィンドウより体内の減 弱分布を推定する手法が提唱され4). 前田らによ 1) Segmentation with Scatter and Photopeak window data for Attenuation Correction (SSPAC) 法が開発 され、臨床応用が可能となった 5^{-7} 。本法は、 SPECT のフォトピークウィンドウおよび散乱線 ウィンドウより減弱分布を推定し減弱マップを作 成するため、CTAC 法で問題となっている SPECT 画像と減弱マップの位置ずれがなく減弱 補正が可能である。また、減弱補正用 CT を撮影 することが不必要なため CT による被曝がない。 しかし, 散乱線画像から体輪郭や肺野外縁を抽出 しているため、体内の散乱線分布の状態によって は輪郭抽出ができない場合もある。臨床における 成功率は、^{99m}Tc-Tetrofosmin (TF) による負荷安 静 SPECT で、負荷時 300 MBq 投与で48.2%、安 静時 600 MBq 投与で85.5%, どちらか一方が成 功は91.9%と報告されている⁸⁾

今回、減弱補正に SSPAC 法を用い、ファントム実験により胸壁・縦隔バックグランド (BG) 濃度を変化させて、減弱マップ作成の成功・不成功の検討を行った。さらに、散乱・減弱補正を行わない No Correction (NC) 法、散乱線補正にTEW 法、減弱補正に CTAC 法を用いた方法 (CTAC 法) と比較し、散乱線補正に TEW 法、減弱補正に SSPAC 法を用いた方法 (SSPAC 法)の有用性を検証した。

Ⅱ. 使用機器

SPECT 装置は 3 検出器型 SPECT装置 GCA-9300A/PI(東芝メディカルシステムズ),コリメータは Low energy Super High Resolution Parallel Hole Collimator(東芝メディカルシステムズ)を使用した。空間分解能の指標 Full Width at Half Maximum (FWHM) は,^{99m}Tc におけるSPECT 画像(回転半径 132 mm)の中心部分で 11.1 mm であった。データ処理装置は GMS-7700B,GMS-5500A/PI

(東芝メディカルシステムズ)を使用した。CT 装置は Aquilon64(東芝メディカルシステムズ)を使用した。心肝ファントムは、Cardiac Phantom (Data Spectrum Corporation 製)を使用した。

Ⅲ. 方 法

1) SPECT 収集および処理

SPECT 装置の収集条件は、マトリクスサイズ 128×128 (1 pixel=3.4 mm), 6 度ステップで 1 検出器あたり120度、計360度方向で収集した。収集時間は 30 sec/step の心電図非同期 SPECT 収集を行った。

散乱線補正法はTEW法¹⁾を用い, energy window を ^{99m} Tc の photopeak 140 keV に対し main window 20%, main window の低エネルギー側に sub window 7%を設定してメインウィンドウ内の散乱線を推定し散乱線の除去を行った。

再構成法は、filtered back projection (FBP) 法を用い、前処理フィルタは Butterworth filter (order 8 cutoff 0.47 cycles/cm)、再構成フィルタは ramp filter を用いた。再構成を行った後、逐次近似 Chang 法(逐次近似回数 1回) により減弱補正を行った。今回検討を行う減弱補正に使用した減弱マップの作成方法を 2) ならびに 3) に述べる。

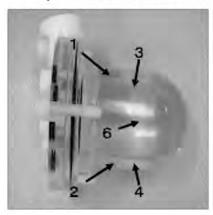
2) CTAC 法

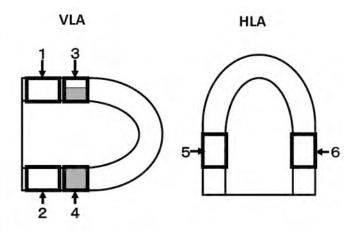
CT 装置により心肝ファントムをヘリカルピッチで撮像し、5 mm ピッチで再構成した。それをdigital imaging and communication in medicine (DICOM) ネットワークにより X線 CT 画像を核医学画像処理装置に取り込み、automatic registration tool (ART) 法⁹⁾を用い、SPECT 画像と X線 CT 画像の 3 次元自動位置合わせを行った後、GMS-7700B に搭載されている変換式を利用し、140 keV のエネルギーに合った線減弱係数に変換し、減弱補正を行った。

3) SSPAC 法

GMS-7700B に搭載されている SSPAC 法の原理 は次の通りである。収集した SPECT データの散 乱線画像から、体輪郭の自動描出を行う。次に得 られた体輪郭と微分画像を用いて肺の外縁を楕円 近似し、体輪郭サイズで調整したモデル縦隔を貼

Myocardial Phantom





1: Anterior wall

2: Inferior wall

3: Ischemic Area

4:Infarct Part

5:Septum

6: Lateral wall

Fig. 1: Cardiohepatic phantom and ROI setting images

Using Cardiac Phantom, ^{99m}Tc was encapsulated in the cardiac muscle at 100 kBq/ml and in the liver at 33 kBq/ml. The chest wall and mediastinum not including the lung fields were defined as BG part. A 50% ischemic site on the cardiac anterior wall and a 100% infarction site on the cardiac inferior wall were prepared. On the images prepared in the direction of VLA and HLA, ROI was set for a total of 6 sites [(1) anterior wall, (2) inferior wall, (3) anterior wall ischemic site, (4) inferior wall infarction site, (5) septum, and (6) lateral wall], and a comparison was made in terms of percent uptake.

付する。これに、フォトピーク画像から心臓と肝臓を抽出し体輪郭に貼付する。そして体輪郭サイズで調整したモデル胸椎とベッドを貼付する。各部位に減弱係数の割付を行い、SPECT 位置分解能と同等の分解能劣化フィルタ処理を行うことにより、各スライス面での減弱補正マップの作成を行う方法である⁵⁾。

4) 心筋ファントム

心肝ファントムは、^{99m}Tc を心筋部分に 100 kBq/ml, 肝臓部分に 33 kBq/ml 封入し, 肺野以外の胸壁・縦隔を BG 部分とし濃度を変化させた ^{99m}Tc を封入した。心筋の前壁に 20×25×5 mm の50%虚血部位、下壁に 15×20×10 mm の100% 梗塞部位を作成した (**Fig. 1**)。

Ⅳ. 検討項目

検討 1. **SSPAC** 減弱マップ作成の成否と **BG** の 関係についての検討

方法 4) で示した心肝ファントムの BG 部分に 99m Tc を 33, 25, 20, 15, 10, 5, 2.5 kBq/ml と 変化させて封入し、SPECT 収集を行った。収集 した投影データを用い、SSPAC 法による減弱 マップ作成を行い、その成否を調べた。減弱マップ作成の成否はソフトウェアの完了・未完了を判定基準とした。

検討 2. SSPAC 減弱マップ作成成功例に対する 検討

2-1. Polar Map 表示およびプロファイルカーブ による比較

検討1で述べた SSPAC 減弱マップ作成成功例に対して、NC法、CTAC法、SSPAC法で再構成を行った。再構成画像に対して心筋軸変換処理を

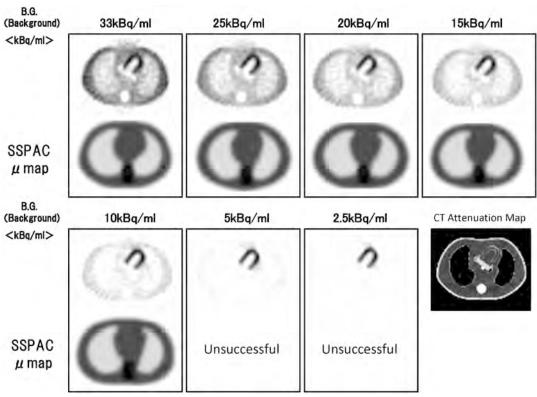


Fig. 2: SPECT images and cases in which preparation of SSPAC attenuation maps was successful At BG concentrations of 30, 25, 20, 15, and 10 kBq/ml, preparation of SSPAC attenuation maps was successful. Regardless of the change in the BG concentration, there were no major differences in the attenuation maps between SSPAC and CTAC method excluding a little difference of shape on the mediastinum fields. At low BG concentrations of 5 and 2.5 kBq/ml, however, poor delineation of the body contour occurred during the process, and preparation of the attenuation maps was unsuccessful.

行い Polar Map 表示を作成した。さらに心筋短軸 断層像 (SA: short Axis) の欠損部のない任意断面 を水平軸方向のプロファイルカーブで比較した。

2-2. ROI 値による比較

検討1で述べた SSPAC 減弱マップ作成成功例に対して、NC 法、CTAC 法、SSPAC 法で再構成を行った SPECT 画像より心筋軸変換処理を行い、長軸垂直断層像 (VLA: vertical long axis)、心筋短軸断層像 (SA: short Axis)、長軸水平断層像 (HLA: horizontal long axis) 画像を作成した。作成した VLA、HLA 方向の画像に前壁 (1)、下壁(2)、前壁虚血部位 (3)、下壁梗塞部位 (4)、中隔 (5)、側壁 (6)、計6箇所の ROI を設定し、%uptake で比較した (Fig. 1)。

設定した ROI の大きさは, 前壁 (1) と下壁

(2) は14×12ピクセル, 前壁虚血部位 (3) と下壁 梗塞部位 (4) は8×12ピクセル, 中隔 (5) と側壁 (6) は12×16ピクセルとした。なお, %uptake とは ^{99m}Tc 製剤の心筋での相対的な取り込み量を表したものであり, 今回測定対象とした6箇所の ROI 値の中の最大値を100%として求めた。

測定した各領域の %uptake に対して次のようにスコア化にて評価を行った。 0 (75%以上),

- 1 (65~75%), 2 (55~65%), 3 (45%~55%),
- 4 (45%未満) とした¹⁰⁾。

検討3. SSPAC 減弱マップ作成不成功例に対す る検討

検討1で述べた SSPAC 減弱マップ作成不成功 例に対して,不成功例の SPECT 画像と SSPAC 減弱マップ作成成功例の減弱マップを ART によ

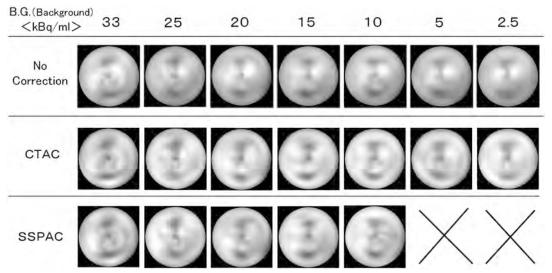
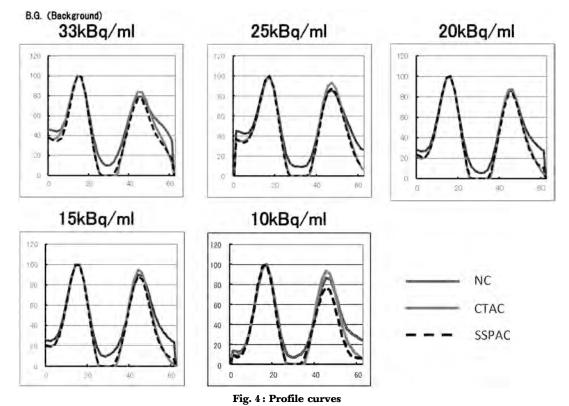


Fig. 3: Polar maps reconstructed by NC method, CTAC method, and SSPAC method. On the map reconstructed by NC method, a slightly decrease on the inferior wall was observed. On the map reconstructed by CTAC method, the ischemic site and the infarction site were visualized clearly. SSPAC method demonstrated visualization ability comparable to CTAC method even when only the successful cases were analyzed.



At any BG concentration, SSPAC and CTAC showed similar curves. In NC method, the cardiac lumen showed a higher value than the other regions, and the outer lateral wall showed a higher value in proportion to BG concentration.

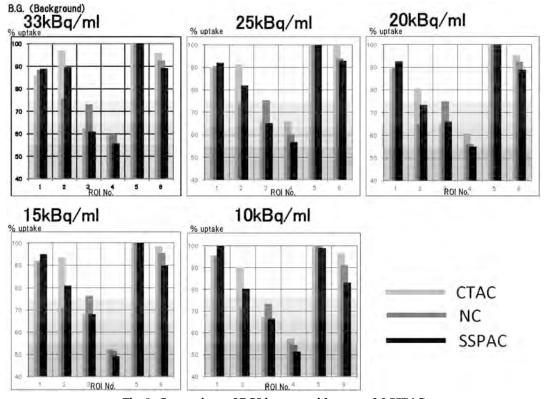


Fig. 5: Comparison of ROI in cases with successful SSPAC
On the results of percent uptake of ROI at 6 sites set for VLA and HLA reconstructed by NC method, CTAC method, and SSPAC method, CTAC and SSPAC showed the same score. NC showed a little different score in comparison to the others.

り位置合わせの後、SSPAC 法で再構成を行った。 SSPAC 減弱マップ作成成功例の減弱マップを代 用した再構成画像に対して心筋軸変換処理を行 い、使用した減弱マップ毎に検討2-2と同様の検 討を行った。

V. 結 果

検討 1. **SSPAC** 減弱マップの成否と **BG** の関係 についての検討

BG 濃度を変化させたファントムの SPECT 画像と SSPAC 減弱マップ作成成功例の減弱マップを **Fig. 2** に示す。BG 濃度が 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml では SSPAC 減弱マップの作成が成功した。 SSPAC 減弱マップは,BG 濃度の変化に関わらず CT 画像に近似された形で縦隔・脊髄・肺野が描出され,CT 画像に比し減弱マップの縦隔部分に若干の形状差はあるものの大きな相違はな

かった。

しかし、5, $2.5 \, kBq/ml$ と BG 濃度が低い場合、処理途中で体輪郭の作成不良がおこり不成功となった。

検討 2. SSPAC 減弱マップ作成成功例に対する 検討

2-1. Polar Map 表示およびプロファイルカーブ による比較

BG 濃度を変化させた、NC 法、CTAC 法、SSPAC 法の Polar Map 表示を **Fig. 3** に、同様に SA 像のピークカウントで正規化したプロファイルカーブの結果を **Fig. 4** に示す。

Fig. 3 において、どの手法で再構成した Polar Map 表示でも、虚血部位、梗塞部位は描出されていた。全ての方法において、どの BG 濃度でも描出に差は認められなかった。しかし、NC 法は

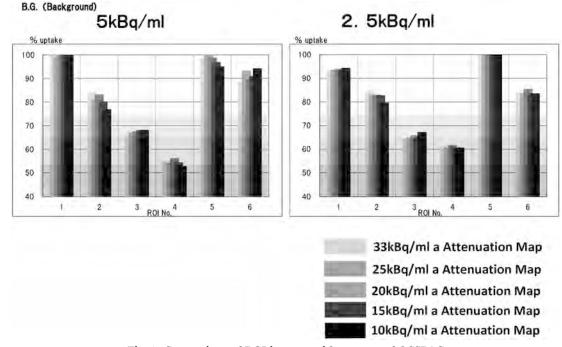


Fig. 6: Comparison of ROI in cases with unsuccessful SSPAC
When we used the attenuation maps of cases with successful SSPAC, a slight difference in score was observed, but substitution for unsuccessful cases could be achieved at any BG concentration.

他の方法に比し下壁に若干の uptake 低下が認められた。また SSPAC において減弱マップ作成が成功した10から 33 kBq/ml の BG 濃度であれば、CTAC 法と同等に描出されていた。

Fig. 4 において、どの BG 濃度でも SSPAC と CTAC は同様なカーブを示していた。NC 法では 心内腔は他方に比し高値を示し、さらに側壁外側 は BG 濃度に比例して高値を示していた。

2-2. ROI 値による比較

NC 法, CTAC 法, SSPAC 法で再構成を行った SPECT 画像より心筋軸変換処理にて作成した VLA, HLA に対して設定した 6 箇所の ROI の %uptake の結果を **Fig. 5** に示す。

各領域の %uptake に対して検討項目で述べた スコア化にて評価を行った。

前壁 (1), 中隔 (5), 側壁 (6) はどの濃度域においても、NC 法、CTAC 法、SSPAC 法のいずれにおいてもスコア (0) となり、差は見られなかった。

下壁 (2) の BG 濃度が 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml におけるスコア分布は、NC 法ではスコア 0, 1, 2, 1, 1, CTAC 法は全てスコア 0, SSPAC 法は 0, 0, 1, 0, 0 になった。NC 法は他の 2 法に比し大きく乖離したが、CTAC 法とSSPAC 法ではほぼ一致した。

前壁虚血部位 (3) の BG 濃度が 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml におけるスコア分布は、NC 法ではスコア 1, 0, 0, 0, 1, CTAC 法はスコア 2, 1, 1, 1, 1 SSPAC 法は 2, 1, 1, 1, 1 になった。CTAC 法および SSPAC 法はどの BG 濃度でもスコアは同じであった。NC 法は他の 2 法に比し, 10kBq/ml 以外でスコアは乖離を示した。

下壁梗塞部位 (4) の BG 濃度が 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml におけるスコア分布は, NC 法はスコア 2, 2, 3, 3, CTAC 法は 2, 1, 2, 3, 2, SSPAC 法は 2, 2, 2, 3, 3, になった。全ての方法においてスコア上ほぼ一致した。

検討 3. SSPAC 減弱マップ作成不成功例に対する検討

SSPAC 法にて減弱マップ作成に失敗した BG 濃度が 5 および 2.5 kBq/ml の代用として,減弱マップ作成に成功した 10 から 33 kBq/ml の BG 濃度の減弱マップを用いて画像再構成した場合の結果を **Fig. 6** に示す。結果の検討は,検討 2 で用いた方法と同等である。

BG 濃度 33, 25, 20, 15, $10 \, \text{kBq/ml}$ の減弱マップを使用した,前壁 (1),下壁 (2),中隔 (5),側壁 (6)のスコア分布は,BG 濃度 $5 \, \text{kBq/ml}$, $2.5 \, \text{kBq/ml}$,両者においてすべてスコア $0 \, \text{となり}$,差は見られなかった。

BG 濃度 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml の減弱マップを使用した,前壁虚血部位(3)のスコア分布は, BG 濃度 5 kBq/ml ではすべてスコア1となった。2.5 kBq/ml ではスコア 2, 2, 1, 1, 1であった。スコア 2 を示した BG 濃度 33 kBq/mlと 25 kBq/ml の減弱マップを使用した %uptake 値は各々64.3%と64.6%であった。

BG 濃度 33, 25, 20, 15, 10 kBq/ml の減弱マップを使用した,下壁梗塞部位 (4) のスコア分布は, BG 濃度 5 kBq/ml ではスコア 3, 3, 2, 3, 3 であった。スコア 2 を示した BG 濃度 20 kBq/ml の減弱マップを使用した %uptake 値は56.1%であった。2.5 kBq/ml ではすべてスコア 2 であった。

VI. 考 察

心筋 SPECT の減弱補正は、その減弱分布の不均一さにより補正無しで行われるのが一般的であった。近年になって X 線 CT を用いた手法 (CTAC 法) が普及してきたが、別の方法として前田らの開発した CT を用いずに SPECT のみから減弱マップを推定する方法 (SSPAC 法) が開発され臨床に使用されつつある $^{5\sim7}$)。しかし、SSPAC 法は、散乱線ウィンドウより体内の減弱分布を推定し減弱補正を行う方法であるが、体内の散乱線分布の状態によっては減弱マップを作成することができないことが報告されている 8)。

SSPAC 減弱マップ作成の成功率の違いは、心筋周辺の胸壁・縦隔の ^{99m}Tc 濃度にあると考え、^{99m}Tc 製剤を封入したファントムを用い

SSPAC の有用性における基礎的検討を行った。

SSPAC 減弱マップ作成成否と BG 濃度の関係 について、Fig. 2 が示すようにBG濃度が低い場 合(5, 2.5 kBq/ml), SSPAC 法は処理途中にて体 輪郭の作成不成功を示した。これは、本法が SPECT のフォトピークウィンドウおよび散乱線 ウィンドウより減弱分布を推定する手法であるた め、減弱マップの作成を成功させるには、心筋の 集積以外にも胸壁・縦隔にある程度の散乱線量す なわち RI の集積が必要なことが示唆される。林 の臨床的検討によると、1日法で行う負荷安静 SPECT において、SSPAC 減弱マップの成功率 は、負荷時が48.2%、安静時が85.5%と報告され ている。このときの 99mTc-TF の投与量は、負 荷:安静=300 MBq:600 MBq となっており、負 荷時の投与量が少ない⁸⁾。このことが、負荷時と 安静時の成功率の差の一因と考えられる。作成が 成功した SSPAC 減弱マップと CTAC 減弱マップ を比較した場合、肺野や縦隔の大きさに相違があ る。SSPAC 法は、散乱線ウィンドウにより体輪 郭と肺野外縁を推定し、その後に体格に応じたモ デル縦隔を貼付する手法である。しかし、モデル 縦隔は散乱線成分から推定していないので実際の 減弱分布とは異なっており、今回の実験では CTAC 減弱マップより小さい縦隔となっている。 このことが相違の原因であると考えられる。

SSPAC 減弱マップ作成成功例と NC法, CTAC 法との比較について考察する。Fig. 4 に示 すプロファイルカーブの結果において、NC 法で は心筋ファントムの心内腔と側壁外側のアクリル 部分が高値となっている。これは、 散乱線補正が 行われていないために、BG 部分からフォトピー クウィンドウ内への散乱線成分の影響であると考 えられる。さらに、側壁外側が BG 濃度に比例し て高値となったのは、その箇所が心筋ファントム ではアクリル部分であり、BG 部分からの散乱線 成分が影響しているものと考えられる。CTAC 法と SSPAC 法はどの BG 濃度においても結果が 示す通り、心内腔はカウントが0となり側壁外側 もほぼ同等なプロファイルカーブである。これ は、両法とも散乱・減弱補正が同等に行われてい ることによる結果と考えられる11)。

Fig. 3 の Polar Map 表示, Fig. 5 に示す

%uptake の結果より、各部位ごとについて考察する。前壁 (1)、中隔 (5)、側壁 (6) は結果でも示すように、%uptake はすべてスコア 0 となりスコア上の差は認められなかった。これらの部位では、正常な RI 集積であれば同じスコアを示すことが確認できた。

下壁(2)では、NC 法は Polar Map 表示でも若干の低下が認められており、%uptake もスコアが他の2法に比し1ポイント低下している。これは、減弱補正が行われていないことにより、縦隔、肝臓の減弱の影響を受けカウント値が低下するためと考えられる。CTAC 法と SSPAC 法は、一部にスコアの乖離が認められるもののほぼ同じ値を示している。このことにより、減弱マップの違いはあるがほぼ同じ減弱補正の効果が期待できる。

前壁虚血部位(3)では、Polar Map 表示ではすべて虚血部位は認められる。しかし、NC 法はスコアが他の2法に比し1ポイント上昇したためスコア0が存在し、見た目上は虚血が認識されるがスコア上は正常とみなされることになる。これは、プロファイルカーブの考察で述べた散乱線の影響より虚血部位のROI内カウントが上昇したためと考えられる。この現象は、前壁(1)、中隔(5)、側壁(6)の部分が虚血部位になった場合でも起こる可能性があり、スコア評価を行う場合は散乱線補正が必須である。CTAC 法と SSPAC 法では散乱線補正に TEW 法を用いているためスコア上でも同等の虚血部位として認められる。

下壁梗塞部位(4)では、どの方法でもスコア上は同等の値を示している。しかし、NC法は下壁(2)の考察で述べた減弱の影響を受けカウント値が低下しているところにRIの存在しない梗塞部位を作成しているにもかかわらず他の2法とほぼ同等なスコア値を示している。これは、メインウィンドウへの散乱線の混入により梗塞部位のROI内カウントが上昇したためと考えられる。CTAC法とSSPAC法は、同じように散乱・減弱補正を行っているがスコア上若干の違いが見られるのは、減弱マップの違いによるものと推測される。CTAC法はCT画像から減弱分布を得るため正確な不均一減弱マップの作成が可能であるが、SSPAC法は散乱線ウィンドウにより体輪郭と肺

野外縁を推定し、その後に体格に応じたモデル縦隔を貼付しており、前述したとおりモデル縦隔がCTAC減弱マップに比し小さい。散乱線補正のTEW法は完全に散乱線を除去できるとは限らず、散乱線成分が完全に除去されていない画像に対してCTAC法及びSSPAC法の減弱補正が行われる¹²⁾。SSPAC法の場合、実際の減弱分布に比し縦隔が小さく肺野が大きいことによりアンダーコレクションになりカウント値が低下すると考えられる。このことがCTAC法の場合、SSPAC法に比し若干高めの%uptakeを示す一因と考えられる。

SSPAC 減弱マップ作成不成功例に対する代用マップの考察をする。

Fig. 6 に示す %uptake の結果より、SSPAC 減弱マップ作成成功例の減弱マップを用いた場合スコア上では若干の違いは見られたが、どの BG 濃度の減弱マップを用いても不成功例の代用が可能であった。このことにより、同一患者の負荷安静SPECT において、負荷安静 どちらか一方でSSPAC 減弱マップ作成が成功すれば、SSPAC 法による減弱補正が可能となる。実際の臨床において、林の報告より、約92%の確率で減弱マップ作成が期待できる8)。

結 語

SSPAC 法は SPECT のフォトピークウィンドウおよび散乱線ウィンドウより減弱分布を推定し減弱マップを作成するため、CTAC 法で問題となっている SPECT 画像減弱マップの位置ずれがなく減弱補正が可能である。また減弱補正用 CTを撮影する必要がないため、CT による被曝がない。今回の検討において、^{99m}TC 製剤を用いた心筋血流シンチグラフィの SSPAC 減弱マップは、作成成功は BG 濃度が関与し、CTAC 法とほぼ同等の減弱補正効果が得られることがファントム実験より示された。%uptakeで比較した場合、NC 法に比し虚血部位や梗塞部位が明瞭に描出され、下壁の減弱の影響による低下の改善がなされた。

また, 負荷安静 SPECT においてどちららか一 方の SSPAC 法減弱マップ作成が成功すれば, 他 方に代用可能であることが示唆された。

謝辞

今回の論文執筆にあたりご協力いただいた,日本メジフィジックスの仁井田秀治氏,高山正弘氏,東芝メディカルシステムズの久保田雅博氏に厚く御礼いたします。

引用文献

- Ogawa K, Harata Y, Ichihara T, et al: A practical method for position-dependent Compton-scatter correction in single photon emission CT. IEEE Trans Med Imag, 10: 408-412, 1991
- Chang.L.T. Attenuation correction and incomplete projection in single photon emission computed tomography. IEEE Trans Nucl Sc, I: 2780-2789, 1979
- 3) 増田安彦, 長木昭男, 川渕安寿, 他: 臨床に役立 つ基準画像の収集・処理・表示・出力のポイン ト. 核医学技術, **28**: 13-66, 2008
- 4) 白川 誠士,前田壽登,佐橋典児,他:心筋 SPECT における TCT なしでの減弱補正の試みー 散乱フォトピークウインドウデータからの減弱係 数マップの算出-.第30回東海循環器核医学記録 集:9-10,1999
- 5) 前田壽登, 白川 誠, 長谷部 哲, 他: 心筋 SPECT における減弱補正(散乱・フォトピーク データからの減弱係数マップ作成および減弱補

- 正). メディカルレビュー, (90): 7-11, 2003
- 6) Koichi Okuda, Kenichi Nakajima, Nobutoku Motomura, et al.: Attenuation correction of myocardial SPECT by scatter-photopeak window method in normal subjects. Ann Nucl Med, (23): 501–506, 2009
- 7) 奥田光一, 中嶋憲一, 絹谷清剛, 他: SSPAC 法 を使用した減弱補正の有用性に関する検討 – SPECT-CT との比較. 第51回北陸循環器核医学研 究会記録集: 7-10, 2009
- 8) 林 万寿夫. SPECT/CT 時代に向けた画像補正 の中身-SPECT ユーザーからの報告(東芝ユー ザー: 3D-OSEM)-. 核医学技術, (**32**): 95-100. 2012
- Ardekani BA, Braun M, Hutton BF, et al.: A fully automatic multimodality image registration algorithm.
 J Comput Assist Tomogr, Jul-Aug; 19 (4): 615–23, 1995
- 10) 若林康治, 今井嘉門, 諸澄邦彦, 他: 一体型 SPECT/CT を用いた ^{99m}Tc 心筋血流 SPECT の減 弱補正の評価 - 定量分析による検討 - . 日本放射 線技術, **66**(4): 371-378, 2010
- 11) 柳沢正道:心筋 SPECT における定量化と標準化. **60**(5):666-675, 2004
- 12) 林万寿夫,福村勝典,浅津 輝,他:散乱·減弱 補正法を用いた局所脳血流量測定法の検討. 核医 学技術, (17): 2-9, 1997